

1997.8.14 11:46 AM

No.5

貨幣的經濟理論の一潮流（第2版）
ーヴィクセル・コネクションの可能性ー

小峯 敦

1997年7月

1997.7.28

貨幣的経済理論の一潮流

－ヴィクセル・コネクションの可能性－

小峯 敦*

謝辞

本稿は、第61回経済学史学会（1997.11.8~11.9、福井県立大学）の発表原稿である。また『経済学史学会・年報』35号（1997.11）の草稿でもある。

本稿の作成にあたって、次の便宜を得たので感謝したい（順不同）。

- (1) 新潟産業大学・数理経済学研究部会（1995年度・1996年度）の助成を受けた。
- (2) 経済理論史研究会（1997.6.21、於専修大学）でのコメントに感謝する。特に浅田統一郎氏（中央大学）・野口旭氏（専修大学）・吉田雅明氏（専修大学）・渡会勝義氏（一橋大学）。
- (3) 次の方々から資料収集・抜刷送付の便宜を受けた。池尾愛子氏（國學院大学）・岡田元浩氏（甲南大学）・奥田真也氏（一橋大学）・下平裕之氏（山形大学）・田中秀臣氏（上武大学）・塘茂樹氏（京都産業大学）・根岸隆氏（青山学院大学）。
- (4) 明石茂生氏（成城大学）は、本稿に関する質問に私信で回答された。
- (5) 八木紀一郎氏（京都大学）・栗田啓子氏（東京女子大学）には学会関係でお世話になった。

* 新潟産業大学・経済学部。E-mail: komine@piano.nsu.ac.jp

要旨

本稿の目的は、貨幣的経済理論の潮流に関する近年の研究を展望することである。この目的を達するために、考察する範囲をヴィクセルからケインズに至る流れに限定する。本稿の結論は貨幣的経済理論の発展を跡づけるには、ヴィクセル・コネクション Wicksell Connection という概念がなお有益である、というものである。具体的には、ヴィクセル・コネクション概念を5つの観点（「組織された」ヴィクセル・コネクションの概念）から再定義することによって、貨幣的経済理論の潮流に関して、より豊穡な研究を促したい。

Key Words:ヴィクセルコネクション・貨幣的経済理論・ヴィクセル・ケインズ
展望・20世紀初頭

JEL Classification: B31 History of Thought: Individuals
(B Methodology and History of Economic Thought)

はじめに
ヴィクセルをめぐる研究の展望
ヴィクセル・コネクション概念に対する反対論
ケンブリッジ学派の2例
「組織された」ヴィクセル・コネクション
おわりに

はじめに

本稿の目的は、貨幣的経済理論の潮流という視角から、ヴィクセルやケインズをめぐる近年の研究を展望することである（以下、敬称略）。

本稿では「貨幣的経済理論」という用語は、シュンペーターの「貨幣的分析」monetary analysis とケインズの「貨幣経済」monetary economy を意識して使われる。前者は、「貨幣の要素を我々の分析構造のまさに基盤に導入し、経済生活のあらゆる本質的特徴が物々交換モデルで代表しうるという考え方を放棄する」（『経済分析の歴史』p.278）ものである。また後者は、「貨幣がそれ自身の役割を演じて、動機や決意に影響を与える経済」（全集第13巻 p.408）である。つまり「貨幣的経済理論」とは、「いかなる意味でも物々交換モデルに還元できないほどに、貨幣の役割が存在する経済を分析する理論構造」と暫定的に定義することができる。

20世紀初頭の貨幣敵経済理論の潮流を振り返ろうとする場合、ヴィクセルとケインズは共に最重要人物である。一方でヴィクセルは、「財貨側の変動と貨幣側の変動とを謂わば不可分のものと...するヴィクセル理論が常にその出発点として役立った」（青山(1953) p.173）人物であり、「貨幣的経済理論の展開はヴィクセルに始まる」（矢尾(1962) p.16）と評価されてきた。他方でケインズは、生涯をかけて「生産の貨幣理論」the Monetary Theory of Production を構築しようと模索したこともよく知られている。またケインズ自身が「私の言おうとしていることはヴィクセルのそれと根本的には同じである」（『貨幣論』p.178）と自己規定した時、両者の詳細な比較が学史上の重要な論点に浮上するのは自然である。

本稿の結論を先取りしておく。貨幣的経済理論の発展を跡づけるには、ヴィクセル・コネクション Wicksell Connection という概念がなお有益である、というものになる。確かに「貨幣的」という形容をいかに実体化するかという問いは難問である。この問いは学説史の射程からも現代理論の領域からも答えが待たれるものである。本稿では特に近年の日本における研究を展望することで、迂遠ながら貨幣的経済理論の実体を顕在化しようと試みる。

本稿の構成は次の通りになる。第2節では、まずケインズとの関連で近年のヴィクセル研究等を展望する。海外文献は一瞥し、国内文献の中で特に2つの論文をやや詳細に吟味

する。第3節では、ヴィクセル・コネクションという考え方に反対する論者を取り上げ、簡単に論評する。第4節では、ケンブリッジにおいてヴィクセル的要素が窺える例を2つ挙げる。第5節では、「組織された」ヴィクセル・コネクション概念を提唱する。最後の第6節では、本稿の課題を簡単に述べる。

ヴィクセルをめぐる研究の展望

貨幣的経済理論という視野の下でヴィクセルやケインズを考察する際には、少なくとも次の3つのような接近方法が行われている。第1に、両者を直接に比較検討する方法である。第2に、通史としてヴィクセルからケインズへを1つの学説史の流れ(ヴィクセル・コネクション)とみなす方法である。第3に、オーストリア学派やストックホルム学派を探究する重要な脇役として、両者の位置を確認する方法である。

以下では、この3つの分類と海外文献・国内文献の区別を意識して、近年の研究動向をみていくことにしよう。

(1) 海外文献

本稿が対象とする論題を考慮する際に、Leijonhufvud (1981)がスローガンとしては決定的な影響力を持った。そこでこの論文の発表時期を大まかな基準として、その前後の論考をいくつかのまとまりから整理することにする。

まず第1に、海外の論考はヴィクセル~ケインズの直接比較と、マクロモデルの彫塑が多い。前者は理論の大家によるものが多く、後者は経済成長論の隆盛の中で発展した。

(a)

まず前者として Marchal et Lecaillon (1967)がある。これは貨幣的分析の歴史を包括的に研究した古典である。ヴィクセルの理想は革命的であり、その貨幣理論は新しい接近方法であった。その斬新さは古典派の二分法・セイ法則・比較静学を捨て、貨幣的接近法と動学分析を行った点にある。ここで貨幣的接近法とは「実物的要因と貨幣的要因が、同じようにその影響力を感じさせる」(Marchal et Lecaillon (1967)訳 p.58)方法である。この著作は特にケインズとの対照をしているわけではないが、ヴィクセルの貨幣理論に関する貢献に光を当てた初期の意欲作である。次にヒックスの著作が重要である。例として Hicks (1967)の中の「ケインズ『貨幣論』に関する覚え書」と「ハイエク理論の再検討」を挙げる。前者には価格の伸縮性・固定性の論点とロバートソン論文の重要性を含んでいる。また後者はヴィクセルの後継者として、ハイエクとケインズのどちらが正しかったかという発想になっている。また Hicks (1977)ではヴィクセルを「極めて先見的」(Hicks (1977) 訳 p.91)とみなし、「貨幣制度はヴィクセルが考えていた方向にさらに進む」(Hicks (1977) 訳 p.79)とされた。この論文では、貨幣供給量や自然利子率に関するヴィクセルとケインズの違いにも言及している。さらに Patinkin (1976)は、両者の違いよりも基本的に類似した考え——発達した銀行組織を伴った経済に貨幣数量説を拡張し、利子率によって物価の動

学的過程を分析することーが重要であると判断した (Patinkin (1976) 訳 p.57)。Chiodi(1991)はヴィクセルの「均衡」概念を見直すことによって、その貨幣理論に光を当てた著作である。また Uhr(1991)の題名「新古典派で因襲破壊者」は、ヴィクセルの二重性をよく示している。なお明石(1988) p.30 の注5に、さらに3つの海外文献が紹介されている。

(b)

後者の代表は、Stein (1969)や Fischer (1972)を嚆矢として発展した「貨幣的成長モデル」である。両者は「ケインズ~ヴィクセル的貨幣的成長モデル」を提示している。そのモデルでは、貯蓄と投資の独立性と財市場の超過需要が物価上昇をもたらすことが前提とされている。それに対し「新古典派モデル」では独立した投資関数は存在せず、すべての市場は持続的に均衡にある。方向では以上のようなモデルをさほど顧みない。なぜならそこで使われる用語やモデルの意味が狭すぎるからである。例えば上記の「ケインズ」を意味し、「ヴィクセル」を指している。また「貨幣的」の意味は、貨幣ストックが貯蓄関数や貨幣政策の独立変数になっていることから命名されている。さらに Fischer (1972)では価格調整の方程式を変更するだけで、長期的な結果が両モデルで異ならなくなると主張される (Fischer (1972) p.888)。こうしたモデルの性格を鑑み、ここではこれらが動学過程を扱った経済成長モデルであることを確認するだけで済ませる。

(c)

Morishima (1989) (1992)は、ヴィクセルの分析装置とケインズの問題意識を結合しながら、新しい貨幣的な不均衡理論を作ろうという試みである。そこでのヴィクセル評価に触れておこう。第1の著作では、セイ法則が「産出と雇用のあらゆる水準で総投資は総貯蓄に等しくなる命題」(Morishima (1989) 訳 p.158)とケインズ的に定義されている。その上で、ヴィクセルはケインズと異なりセイ法則を労働の不完全雇用と結びつけなかったため、「ヴィクセルもまたセイ法則と反セイ法則の中間に、逆説的に捕らえられていた」(Morishima (1989)訳 p.206)。それゆえに「実物経済的理論と貨幣的理論をひとつに統合したという意味でケインズの先駆者であるが、失業についての実質的な理論は何も持っていなかった」(Morishima (1989) 訳 p.206)と結論づけられている。また第2の著作では、貨幣理論に関してケインズとヴィクセルという2つの接近方法が挙げられている。前者は貨幣量を一定として利子率を被決定変数とみなす方法である。後者は利子率を固定して貨幣量を伸縮的に調整する方法である。Morishima (1992)はヴィクセルの方法が好ましいと判断し、完全雇用の仮定をはずした上で貨幣的な累積過程の分析を行っている。2つの著作とも理論家の立場から、ヴィクセルやケインズの発想を新しい理論に結びつけようとしている。

ケインズに言及しているわけではないが、Brems (1986)はユニークである。そこではヴィクセルの累積過程が簡単な1階定差方程式で再述されている。またヴィクセルの新しい手法は、マクロ経済学的 動学的 不均衡分析 の3つであると集約された (Brems

(1986) 訳 p.232)。

(d)

第2に、Leijonhufvud (1981)そのものに簡単な評価を与えておこう。「ヴィクセル・コネクション」というスローガンを提唱したのは、確かに Leijonhufvud (1981)である。彼の目的は、現代理論の諸学派の位置関係をヴィクセルのテマ―利子率の誤調整、つまり市場利子率と自然利子率の乖離―によって明確化することである。彼はヴィクセルに始まった貯蓄～投資分析を貨幣数量説からの枝分かれとみなし、物価変化が貯蓄と投資のタ―ムで記述できることを重視したのだった。

しかし、本稿ではヴィクセル・コネクションという名称は借りるが、提唱者本人の意図や内容を考慮しないことにする。その理由は次にある。彼の望ましい経済理論は「Z理論」(= 『貨幣論』 + 数量調整 = 『一般理論』 - 流動性選好利子論) である。しかし本稿では望ましい貨幣的経済理論としては、このZ理論は不適切とみなすからである。Leijonhufvud (1981)は情報不完全性の論点(例：企業の収益などに関する情報が銀行に正しく伝わらない)という新鮮な問題提起も含んでいるが、本稿ではその名称だけを借りることにする。

(e)

海外文献の第3として、Leijonhufvud (1981)の強い影響が窺える論考を整理しておこう。いずれも1980年以降の論文が中心になる。

初期の Jackman (1972)では利子率の誤調整というテーマは無視されていた。しかし Kohn (1981) (1986)はこのテーマを貸付資金説の動学化で接近した。彼によれば、ケインズの主張する失業状態は貨幣賃金の硬直性に依存する。そのため彼は「『一般理論』は本質の革命ではなく、方法の革命である」(Kohn (1986) p.1191)と判断して、ケインズ革命の意義を限定した。これに対し、Amadeo and Dutt (1994)は同様のモデルを用いながら、Kohn (1986)と全く異なる次の3つの結論を導いている。第1に、固定的な利子率のモデルを受け入れれば、流動性選好説と貸付資金説の論争は重要でなくなる。第2に、静学か動学かではなく、所得概念が分かれ目になる。第3に、賃金の伸縮性は不安定化要因になるかもしれない(Amadeo and Dutt (1994) p.269)。また Mattesini (1984)は利子率の誤調整の理由を実物的要因の変動ではなく、合理的主体による投機的行動に見出している。つまり、情報の不完全性に替えて完全予見における投機的行動を導入しても、両利子率の乖離は持続すると主張された。最後に Trautwein (1996a)は、内生的貨幣供給論が無視されたもう1つのヴィクセル・コネクションであると主張している。

(f)

「情報と協調」(Leijonhufvud (1981)の原題)の文脈で、ヴィクセル・ハイエク・ケインズの関係も次の2論文で考察されている。Snippe (1987)ではヴィクセル・コネクションを、調整過程の学習に関する協調不良に注目する理論群と再定義した(Snippe (1987) p.197)。その上で彼は、ハイエクやケインズがこのヴィクセル・コネクションに含まれる

かどうかを吟味する。ケインズは均衡分析を用いることで短期の攪乱要因を廃し、失業の原因を明確化したのだった。そのため『一般理論』が作った貨幣理論は、ヴィクセル・コネクションの伝統にはないと判断された(Snippe (1987) pp.207-208)。Trautwein (1996b) はハイエクの貨幣理論に光を当てた。彼はヴィクセル・コネクションのハイエク版を「信用貨幣供給の変化する弾力性」(Trautwein (1996b) p.29)と定義した。そして古典派の二分法とヴィクセルの二分法を区別する。前者は相対価格と物価水準の先天的な独立性である。後者は信用貨幣・資本・財の相互作用から貨幣の中立性が長期には成立することである。彼はこれらの基準を導入し、ハイエクの試み——一般均衡論と景気循環現象の溝を埋めること——は失敗であったと結論している(Trautwein (1996b) pp.27-29)。

(g)

最後に、やや毛色の変った論文を4つを紹介しておこう。Jonung (1979)はヴィクセルとカッセル G. Cassel の理論の説明力を実証データから考察している。ヴィクセルは抽象理論を重視していたので、その理論の説明力は弱いとの結論は興味深い。Giovannetti (1984)はロバートソンを媒介としてヴィクセルとケインズを比較する。三者は主に、静学・動学や実物・貨幣の諸点で共通点と相違点がある。貨幣利子率が自然利子率を規定するという発想が、「ヴィクセルの発想の本質的改善であり発展である」(Giovannetti (1984) p.82)と指摘されている。Cottrell and Lawlor (1991)は Leijonhufvud (1981)を傑作と認めつつ、ヴィクセル・コネクションをケインズに適用するその見方に反対している。彼らは『一般理論』第17章「利子と貨幣の基本的性質」に基づき、流動性選好説は退歩ではないとした(Cottrell and Lawlor (1991) pp.625-626)。この批判は Amadeo and Dutt (1994)と違い、貨幣の性質に根ざしたより根本的なものと言うことができる。Caporale (1993)はヴィクセルをリアル・ビジネス・サイクル(RBC)の解説者とみなす。貨幣的分析の推進者として把握されることが多いヴィクセルであるが、彼のような見方も存在するのは興味深い。

(2) 国内文献

この項目では国内文献を展望する。Leijonhufvud (1981)に影響された論考とヴィクセル・ケインズの直接または間接の比較論考が中心になる。

(a)

最初は Leijonhufvud (1981)に触発された日本の研究である。池尾(1994)はヴィクセルとケインズの共通意識と相違を簡潔にまとめている。要約すれば、利子率のフロー理論かストック理論かの違いが、不適切な市場利子率の導く経済状況の差までもたらすとの指摘である(池尾(1994) pp.158-159)。中山(1992)は Leijonhufvud (1981)に最も好意的である。ケインズ経済学が「前進的」であるためには、ヴィクセル主義(情報伝達の失敗を起因とする利子率の誤調整 = 貯蓄 ~ 投資の協調失敗)の不均衡分析を追及しなければならないと説く(中山(1992) p.215)。加納(1992)は Leijonhufvud (1981)の問題提起——利子率の誤

調整という情報の問題――を重要な論点と認めつつ、不確実性に起因する貨幣経済の不安定性を主張するデヴィッドソンの論点との比較対照を行っている（加納(1992) p102, p.190）。原(1994)は Leijonhufvud (1981)に最も批判的である。彼は「Z理論」を拒否し、流動性選好のモデルを正しい貨幣経済理論とみなす。自然利子率と貨幣利子率のどちらに経済が調整されるかという点を重視するからである（原(1996) p.125）。なお、ヴィクセルとケインズの違いは、組織化された証券市場を導入したかどうかにあるとも指摘されている（原(1994) p.99）。またヴィクセルの貨幣理論は、「貨幣あるいは信用が自然利子率になんらの影響を及ぼさないという意味において、実物分析の系譜を踏襲する」（原(1994) p.132）とも判断されている。

(b)

次にヴィクセルとケインズの貨幣的経済理論について、直接・間接に比較検討している論考の展望に移ろう。まず日本において最初期の研究を2つ取り上げた後に、ごく最近の研究動向について触れることにする。

第1に、最初期の研究として青山(1953)を挙げなければならないだろう。これは1939年から1940年にかけて書かれた論文集である（根岸・池尾(1993) p.12）。その題名通り、青山(1953)の関心はロバートソンの経済変動論にあるので、この文脈からミュルダールやリンドールに言及することになる。特に「ヴィクセル的正常利子概念の批判」と題された第7章が重要である。そこでは、「予想収益率・所得・貯蓄・投資等々の概念を性格に把握する限り、経済変動の過程は、正常利子の概念を用うことなくして、分析し得る」（青山(1953) p.173）として、ミュルダールの線上からヴィクセルが批判されている。この章の原文は1940年に書かれ、しかも青山秀夫の最初の論文は「ヴィクセルの自然利子論」(1934)である。つまり、彼の一連の研究は、経済変動論の領域でヴィクセルとケインズ――主にロバートソンを媒介としてだが――を比較検討した最初期のものと判断できる。

第2に、矢尾(1950)を取り上げておこう。彼の意図は、貨幣観から導き出される貨幣経済観＝貨幣作用分析の諸類型――つまり財と貨幣の本質的な関係をどう見るか、また両者の動態における作用関係をどう見るか――を位置づけ、跡づけることである。この著作でヴィクセルは貯蓄～投資分析の出発点として描かれている。ヴィクセルによれば「貨幣の世界は経済主体の意志的決定にかかわる貨幣の流れの循環として規定」（矢尾(1950) p.124）されている。ここにおいて貨幣作用の場面は消費財・資本財の価格水準に分かれるので、ハイエク・ケインズ『貨幣論』へと続く貯蓄～投資分析の萌芽が窺えることになる。このようにヴィクセルの貨幣経済観は先駆的なものであった。しかしその限界も同時にある。（投資＝貯蓄の意味での）貨幣的均衡の実体は生産・雇用・所得に現れるのだが、ヴィクセルは同じ貨幣的均衡でもこれらの水準が異なりうること、つまり「貨幣的均衡の実体的水準の複数性」（矢尾(1950) p.251）を見抜けなかった。そしてこの限界は、完全雇用の前提からは当然の帰結であった。このように矢尾(1950)は極めて早い時期から、ヴィクセルの先駆性と限界を同時に考慮しつつ、貨幣的経済理論の発展を辿っている。先駆性は

貯蓄～投資分析であり、限界は貨幣的均衡の複数性である。この2つの論点は近年でも繰り返し考察されるものであり、この点からも矢尾(1950)の重要性がわかる（なお冒頭に触れた矢尾(1962)については他にも触れている論考があるので、ここでは割愛する）。

この2例や田中(1997)からわかるように、第2次世界大戦前後は貨幣的経済理論の観点から、ヴィクセル・ケインズの因果律を手繰ろうとする研究が集中的に行われていた。しかしその再評価はまだ端緒を開いたばかりであり、詳細は他に譲る。そこで目を転じて、ごく近年の研究のみに焦点を移していこう。

(c)

吉澤(1990)はヴィクセル『経済学講義 第2巻』の貨幣・信用論を取り上げている。また瀧川(1992)は矢尾(1962)の問題意識——貨幣の存在する経済と存在しない経済の根本的差は何か——に触発されながら、ヴィクセル『利子と物価』を検討している。その結論によると、自然経済と貨幣経済では次のような根本的差異がある。まず「貨幣経済の本質的特徴は貸借が貨幣資本の形態で行われること」（瀧川(1992) p.95）である。他方、自然経済では、貸借が自由資本（他の用途に転用が容易な実物資本）の形態で行われている。また貨幣経済は自然利子率と市場利子率の均等化を達成するメカニズムを内包している。続く瀧川(1995)では、ヴィクセルの累積過程論の学史的意味を探っている。ヴィクセルの理論は貨幣供給量を貯蓄～投資ギャップによって内生的に説明しようとするという意味で、「貨幣数量説を補完する議論であり、現在の貨幣制度を前提とした先見性ある分析」（瀧川(1995) p.19）としている。

(d)

他の経済学者を媒介として、ヴィクセルやケインズを考察する論考もある。2つの論考だけ触れておこう。

まず菱山(1990) (1993)はスラッファのハイエク批判を契機として、ワルラス・ヴィクセル・ケインズを比較する。3者とも「組織された信用経済」を考察した。ワルラス体系では、銀行を導入することによって貸付資本市場の調整がより速やかになる。ここは銀行が競売人となっている伸縮価格の世界である。それに対し、ヴィクセル体系・『貨幣論』体系では、銀行は独占体なので利子率が需給調整パラメータとしてうまく機能しない。ここは固定価格の世界である。『貨幣論』の独自性は、銀行の金融行動が産業行動より圧倒的な力を持つと認識した点にある。また自然利子率の定義に関して、「ケインズは、ヴィクセルのこの概念が、始原的にもっていた実物的な性質を、できるだけ払拭して、貨幣的な概念に変換しようと腐心」（菱山(1993) p.56）という指摘は重要である。しかしスラッファのハイエク批判を適応すれば、以上の体系も最終調整目標としての自然利子率というリカードの伝統内にある。菱山によれば、『一般理論』は長期均衡の多義性と引力の中心の逆転というスラッファの論点を批判的に継承している。なお菱山の論点は、ヴィクセルの系譜を長期均衡からの乖離として短期的状況を捉える思考法とみなす藤井(1986)にも通じる。

次に、ジェボンズ交換理論を再評価した中野(1989) (1995)をみる。それによると、ヴィクセルはワルラスとジェボンズの貨幣認識を比較する。前者は貨幣を単なる交換媒介とみなすことによって、間接交換がすべて可能な体系をつくる。後者は直接交換に限定された体系をつくる。どちらも貨幣の流通速度が極端なケース(無限大かゼロか)である。ヴィクセルは貨幣の流通が一定の時間をかけてなされる一般的な場合を考察しようとする。中野によれば、ヴィクセルはこうした認識によって、ワルラス体系では決定できない貨幣の絶対的水準の決定理論を打ち立てようとした。この論点は今後とも考慮すべきものだが、「ジェボンズ均衡とワルラス均衡の相違は、学説史上ヴィクセルの物価の累積過程の分析のミクロ的認識の基礎を与える」(中野(1995) p.182)とまでは判断できないだろう。物価の絶対水準を決定する理論が累積過程分析とは限らないからである。

(e)

現代の経済理論の観点からも、ヴィクセルは新規発想の源となりうる。周知のように岩井(1987)はヴィクセルを高く評価する。なぜならヴィクセルの不均衡累積過程の理論は1つの革命であり、価格の自動調整機構――見えざる手――に対する信奉を根本から揺さぶるものだからである(岩井(1987) p.9)。このような認識の上に岩井(1987)はヴィクセルの経済学を動学的に再構築する。Morishima (1992)などと合わせて考えればわかるように、ヴィクセルの業績は現代の経済理論にも大きな影響を与えることができる。

最後に、あと2・3の論考にも触れておこう。田中(1995)はヴィクセルの累積過程理論の発想のうち、経済主体の物価に対する期待の要素を重視する。その上で期待変更 利率ショック 物価変動 という因果のある経済モデルを作っている。また田中(1997)は鬼頭仁三郎の貨幣的分析を再考し、戦前の研究者の共通理解であった貨幣的分析――貨幣経済学として、ヴィクセルからケインズまでを一連の流れとしてとらえる解釈――に光を与えている。さらにここでは詳しく取り上げないが、橋本(1995)を含む一連の論考はヴィクセルの詳細な年表や伝記の発掘を試みており、文献学的にも意義深いものである。

以上のように、ヴィクセル研究そのもの・ケインズとの対照研究は、両方とも豊穡化していると結論して良いだろう。

(3) ヴィクセル・コネクション

ここでは、日本においてヴィクセル・コネクションという概念を強力に推進した論者2人をやや詳細に取り上げる。

(a)

第1に平井(1990) (1991)である。ヴィクセル・コネクションとはヴィクセルに端を発し、ストックホルム・オーストリア・ケンブリッジの各学派にまたがる貨幣的経済学の発展史を意味している。その中では「古典派の二分法」に対する根本的な批判精神に貫かれている(平井(1990) p.18)。この概念を用いる意義は、貨幣的経済学の発展という無視すべきでない業績を再評価する、ケインズ革命の本質を探る手段になる、支配的パラダイ

ムである新古典派総合を批判的に検討するという現代的な問題になる、という3点にある（平井(1990) p.23）。そして特に K.Wicksell, G.Myrdal, F.A.Hayek, J.M.Keynes (1930) の4人を徹底的に比較検討し、従としてではあるが E.Lindahl, L.Mises にも触れている。最後の方に、これらの論者の共有点と相違点が15項目にわたって述べられている（平井(1991) pp.64-66）。

これは100ページ以上にも及ぶ本格的な研究であり、問題意識に優れた労作ではある。しかし後述の批判者や平井自身が述べているように（平井(1991) p.64）、すべての論者に共通する思考法や分析法となると、その印象は漠として気薄にならざるをえない。つまりヴィクセル・コネクションは4人ないし6人を並列的に扱っているにすぎないという批判もありえる。しかし本稿ではそれにもかかわらず、ヴィクセル・コネクション概念には積極的な意義があると主張する。厳密な意味での共通性がないことは、逆に、これらの論者がいかに確固たる独自の経済理論を構築したかということの証左である。また理論や思想が単純再生産されたわけではない——言い換えれば、「始祖の見解が批判的に継承・発展された」（平井(1995) p.44）——ことの証拠でもある。

(b)

第2に一連の岡田(1992)~(1995)である。これも350ページを超える労作であるので、すべてを要約するのではなく、重要な断片だけを取り上げることにする。岡田(1992)の基本的立場は次に見られる。ヴィクセル・『貨幣論』・『一般理論』にはそれぞれ独立した意義がある。他方、ヴィクセル・コネクションと言うべき共通点——投資変動の重要性と金融市場の理論分析、すなわち「投資主導の貨幣経済理論」（岡田(1992) p.50）——がヴィクセルとケインズには横たわっている。ここで3つの革新性を見ておこう。

第1に、ヴィクセルの革新性は、銀行の性質と行動に彼独特の想定をほどこすことによって、「自然資本利子」と「貸付利子」という2つの利子率の差から巨視的な物価変動理論（累積過程論）を説明した点にある（岡田(1992) p.77, p.88）。しかしそれは貨幣理論に接近するアプローチの斬新さと言うべきであって、「ヴィクセルの思考形式は明らかに伝統の域内にある」（岡田(1992) p.95）。その保守性とは、古典派・新古典派に通有する利子率の利潤率への順応という認識である。

第2に、『貨幣論』の革新性は、「フローとしての投資の決定がストック・レヴェルの経済関係に依存することをはっきりと示した」（岡田(1993c) p.100）ことにある。また『貨幣論』の新しさと限界を見極めることは、ケインズ革命の真義を理解する上でも必須とも主張される（岡田(1993b) p.95）。これはヴィクセル的分析の受容なしには、『貨幣論』のみならず『一般理論』も絶対に登場しなかった（岡田(1993b) p.97）との判断からである。もちろん『貨幣論』も斬新な内容をちりばめていたが、完全雇用＝常態 という判断において伝統と融合していたのだが。

第3に、『一般理論』の革新性は、異端的な経済観をヴィクセル的な理論によって再構築したことにある（岡田(1994b) p.110）。ここで「異端的」の意味とは、市場経済の自動

調整機能を信頼しないことであり、唯一・最適な長期均衡に現実の経済は収束しないことを「一般的」と考えることである(岡田(1994b) pp.86-87)。この異端的なヴィジョンへの転換を考慮すると、1932年末が大転換点として重視されることになる。

この一連の論考はケインズ革命からヴィクセルなどへ遡及する見方を廃し、3つの独立な革命的意義を認めつつ、なお投資変動の重要性という縦糸を貫く。またそれらはヴィクセルのアプローチを軸とし、ヴィクセル自身の貨幣理論・『貨幣論』の斬新さと限界を包括的に考えながら、最後はケインズ革命の本質論まで肉薄する。特に最後の点ではケインズの転換点として、多数説の1933年ではなく、1932年末が強力に主張されていた。つまり岡田(1992)~(1995)はヴィクセル・コネクションの概念をケインズとの比較にも最大限に使った労作であり、多方面に論議を呼ぶ意欲作となるであろう。なお最新の岡田(1997)では視野を広げ、「リカードウが打ち出した貨幣経済理論は、...この分野の展開に基本的な方向づけを与える役割を担った」(岡田(1997) p.16)という判断がなされている。

(c)

なお、マクロ経済学の歴史的な対立の構造を、「パラダイム」(=モデル構造)と「思考法」(=市場に関する根元的な評価・価値観)の2軸を用いて明らかにした次の論考にも触れておく必要があるだろう。

明石(1988)によれば、ヴィクセルリアン・パラダイムは固定産出量~伸縮価格モデルであり、純粋信用フローモデルであった。この方向は2つに分かれる。1つはハイエクに代表されるように、生産構造の変化と信用創造を組み合わせる。もう1つは貯蓄~投資の乖離そのものに累積過程を結びつける。これに対し、ケインジアン・パラダイムはIS-LM図式で表され、フローの均等として所得~支出、ストックの均等として貨幣の需要供給という構造を持っている。ただし、同じパラダイムにあっても「思考法」は異なりうることも指摘される。例えば、古典派的思考法では、長期均衡には求心力があり、それに反する経済の運動はすべて一時的とみなす。これに対し、反古典派的思考法では、長期均衡は存在してもよいがむしろ遠心力を働かせる核となる(明石(1988) pp.207-209)。前者に属するのがヴィクセルや『貨幣論』であり、後者に属するのがリンドガール・ロバートソン・ハロッドである。

明石(1988)は2つの軸からヴィクセルとケインズを比較できるわけだが、この考え方を採用すると必ずしも両者は根元的な対立とはならないとも言えるだろう。なぜならパラダイムは時代とともに変遷していくものであり、対立の構造はむしろ「思考法」の軸でおこるからである。例えば明石(1988)は、形成史的なケインズ評価を次のように行っている。それによれば、『貨幣論』はヴィクセル的要素とケインズ的要素の混合である。また、『貨幣論』から『一般理論』へ至る道はケインズ的要素を純化していく過程であった(明石(1988) p.115)。この表現は、『貨幣論』が単に2つのパラダイムに時間的には含まれているだけという印象も与えてしまう可能性も持つ。

この概念に対する反対論

平井(1990)の提唱する概念について、小島(1993a)と吉田(1995b)の強力な反対を取り上げよう。

(a)

小島(1993a)は、主に次の3点からヴィクセル・コネクション概念に反対する。第1に、両利子率による物価変動の説明、公定歩合政策の重視、貨幣的均衡の3条件の同値性の承認、という3条件だけから『貨幣論』とヴィクセルとつなぐのは無内容である。特にケインズ-ハイエク論争を考慮していない。第2に、実物的分析に属しているヴィクセルを、貨幣的分析に属す『貨幣論』・『一般理論』の源としてはならない。第3に、ヴィクセルよりも重要な人物——ホートレー——をケインズの祖父としなければならない(小島(1993a) p.3、小島(1994) p.24)。

この批判に対する反論を、次のようにそれぞれ指摘することができよう。第1に、平井(1990)はヴィクセル・コネクションの含意を「二分法」に対する根元的な批判に見出している(平井(1990) p.18)。この批判はシュンペーターの「貨幣的分析」——貨幣の中立性の完全な否定——を意識したものに他ならない。第2に、ヴィクセル理論の性格を単純に実物分析とは言い切れない。2つの論拠を挙げておこう。小島(1993a)の言及している矢尾(1962)自身が、ヴィクセルの貨幣経済把握は貨幣数量説のような無差別的統計的ではなく、循環構造的把握の先駆と明記している(矢尾(1962) pp.29-30)。ヴィクセル自身が『利子と物価』から『国民経済学講義』にかけて、貨幣的経済理論を進化させた(ただし明石(1988) p.17はその構成に変化なしと判断する)。その面は後著において、貨幣経済に対立する実物交換経済という構造が消え去っていることからわかる。それに対応して実物経済で規定されていた「自然利子率」に替えて、マクロ的観点から貯蓄 = 投資 が成立する「正常利子率」が考慮された。この正常利子率は新資本の期待収益率に一致するのだから、実物タームではなく貨幣タームになっている。この点は「貨幣経済理論でのヴィクセルの最終的到達点」(岡田(1993a) p.58)である。以上の点からも、ヴィクセルを単純に実物的分析の系譜とは呼べない。貨幣のない世界という虚構を考えないのが貨幣的分析の特徴だからである。第3に、比較対象が拡大することは学史研究にとって歓迎すべきことである。ヴィクセルとホートレーのどちらのコネクションが説得的であるかは、ケインズ革命の本質・ケインズ経済学の形成史をいかに考えるかに依存する。ここでは小島(1994)が貨幣所得 = 生産費の把握を最重要とみていることを確認するだけでよいだろう(小島(1994) p.24)。

(b)

吉田(1995b)は様々な観点からヴィクセル・コネクションに反対する。第1に、これらの学史研究には現在の理論への認識と反省が希薄である。形成史研究のためにも、ケインズ経済学の現況に対し明確な言及が必要である。「もはや形成史研究は、理論の現在に関わらざるをえない」(吉田(1995b) p.151)。平井(1990)の「新古典派総合」はもはや問題で

はない(吉田(1995b) p.158)。第2に、ケインズの一貫した思考の流れを把握することなく、ヴィクセル等に構造把握の助けを借りようとするのは無謀である。特に『貨幣論』の構造を捉える際、ヴィクセルの体系と矛盾しないように把握しなければならない。これは大きな損失になる(吉田(1995b) p.155)。第3に、ヴィクセル・コネクションの概念は、特に『貨幣論』の把握にとってむしろ夾雑物になる。ケインズのメッセージを誤読する可能性が高い。例として自然利子率や均衡の概念が、『貨幣論』とヴィクセルは根本的に違う(吉田(1995b) p.166)。第4に、提示される理論像が脆弱で、現代理論に積極的な意義を持たない(吉田(1995a) p.36)。

これらの批判は、「『貨幣論』と『一般理論』を通じて共通な理論構造がある」(吉田(1995b) p.154)という前提から出発している(連続説)。本稿はこの立場をとらない。ケインズ経済学の形成過程において、部分的に連続する「要素」は存在するが、理論構造で『一般理論』は過去と断絶が多い(連続する部分は主に、投資・金融の主導性・圧倒性というビジョンにある)。つまり本稿では「時間順に並べられたケインズによるテキスト」が徹頭徹尾ケインズのみの一貫した体系とは考えない。当然にヴィクセルやケンブリッジ学派などの影響関係を認める。本稿はこの前提に立つため、例えばヴィクセル・コネクションという投網で『貨幣論』の構造を把握しようとする(つまりヴィクセル的要素を探す)。これに関連し、上記の第3の批判を見ておく。本稿では、実物体系と貨幣体系の両者が揃ったもののみをヴィクセル体系とみなすわけではない。むしろ物価の累積的変動が発生する貨幣体系のビジョンを重視している。第4に関しては、ヴィクセル・コネクションは「重大なメッセージを内包しているという点で意味のある大雑把さ」(平井(1995c) p.44)である、と反論する。前述したように、共通点の希薄さは確固たる独自の各々の体系を証明している。ヴィクセル・コネクションは、抽象のレベルとしてはむしろ「古典派」や「ケンブリッジ学派」に近い。この学派の論者を詳細に見ればバラバラになるが、それでもなお共通点がある。この共通点を確認し、過去の学者を再評価しようというのがヴィクセル・コネクション概念を用いる功德である。

(c)

また、この概念を全否定するのは得策ではない。批判者は「ヴィクセル・コネクションという観念を否定」(小島(1993a) p.1)したり、「有害である」(小島(1994) p.24)と断罪するので、一見この概念は全否定されたように見える。しかし、何よりも批判者自身が「ケインズは...『貨幣論』批判を看取してヴィクセル・コネクションを断ち切った」(小島(1993b) p.33、小島(1994) p.1)と言うように、この概念を用いている。そして平井(1990)がなしたように、過去の経済学者の再解釈を促すことは十分意味ある作業である。『貨幣論』はケインズ独自のビジョンをヴィクセル的分析を借りていかに理論化するかという構造になっている。このビジョンとは、金融資産が生産や雇用といった実物変数へ圧倒的に影響を持ってしまうという新しい資本主義像である。またヴィクセル的分析とは、貯蓄～投資分析による物価の累積的変動論である。このように『貨幣論』はケインズ独自の

要素とヴィクセル的要素の混合体とみなせる。またケインズはヴィクセルの影響を自覚的に認めているのは事実なのだから、その要素がケインズにどの程度摂取されたかを判断するためにも、ヴィクセル・コネクション概念は有用である。そのため小島(1993)のようにホートレーのみを称揚する理由はない(もちろんヴィクセルとは独立に、ホートレーやロバートソンとの交流―ケンブリッジの流れ―を抽出する作業は必要であるが)。

今までの論者の問題意識の違いにも触れておこう。平井と小島は共に経済学史の発生史的側面―過去の学者がどのような問題意識でどのような理論を展開したかをさぐる(平井(1995c) p.47)―に重点を置いている。しかし平井は当事者の「自覚的な」意識を重視しているのに対し、小島はむしろ「無自覚的な」意識を取り上げる。その代表がスラッファとホートレーのケインズへの影響である。再解釈された理論構造を比較するため、影響関係の新たな視点が開かれる可能性がある。しかし今のところ、ケインズの自覚的な意識として、この影響関係が原典(草稿・手紙・メモなど)によって裏付けられたことはないのが難点になる。また、吉田は問題史的側面―埋没した過去の理論を蘇らせて、現代経済学を活性化させる―を重視する立場から平井を批判している。しかし新古典派総合への批判(平井(1995a) p.256)は見かけほど古くない。長期になれば新古典派の体系が復活するという言明は、実物(長期)に収束する貨幣(短期)という思考法そのものである。この思考法の是非は近年改めて問題になっている。また、発生史と問題史のどちらかが優れているとは言えない(平井(1995c) p.47)。知的緊張感を維持するという意味で、ヴィクセル・コネクション論争が豊穡な再解釈・理論構築をもたらすこと期待する。

ケンブリッジ学派の2例

ここではヴィクセル・コネクション概念の有用性の1つの証拠を取り上げる。つまりケンブリッジ学派の中で、ヴィクセル的要素の存在を次の2例から説明する。

ホートレーはヴィクセルとは全く独立に、2つの利率の乖離による経済の累積過程を描写していた。『好況と不況』1913では利潤率と銀行利率の高低が問題となっている。ここで利潤率とは「しばらく行き渡っている事業の真の利潤を示す」(Hawtrey (1913) p.66)とされ、生産者が現在と将来の物価水準を鑑みて算出するものである。つまり利潤率の算定は貨幣タームで行われ、しかもその計算には予想が混入せざるをえない。そしてホートレーは次のように言う。

「現行の利潤率が貸出利率から乖離するときはいつでも、その乖離はただちに拡大する傾向にあるという観察は重要である。…利潤率が何らかの原因でわずかに増加すると、現在の市場利率で貸出需要が増える。しかしこの貸出需要増大は購買力の総量を増やし、またさらに利潤率を増大させることになる。」(Hawtrey (1913) p.76)

この想定は極めてヴィクセル的である。『好況と不況』が『貨幣論』のはるか前に書かれたことを考えると、ヴィクセル ホートレー ケインズという理論的連鎖を想定したくなる。ただし、次の3点を留意する必要があるだろう。第1に、この連鎖を具体的に証拠づける草稿・手紙などは発見されていない。第2に、ホートレーはこの後、ヴィクセル的分析ではなく、貨幣所得・総需要（消費者所得・消費者支出）を用いた景気変動論を展開していく。つまりホートレーにとってヴィクセル的分析は特異点と判断される。第3に、ホートレーは最初から「組織された信用経済」を考察しているので、貨幣なしの実物経済に何の役割を持たせていない。実物経済が信用経済の錨にならないというだけでなく、そもそもそうした虚構が存在しないのである。この面で『利子と物価』のヴィクセルとは異なる。

2つ目の例はロバートソンの「産業変動と自然利子率」1934である。この論文の特徴は「準自然利子率」という概念を導入して、貸付資金説による物価変動を考察したことである。準自然利子率とは新規の貸出と貯蓄が一致する利子率だが、完全雇用とは関係なく、またそこで物価が安定しているわけでもない。ロバートソンの斬新な点は、貨幣的均衡の第2条件（貯蓄と投資の一致）を枢軸として景気変動論を展開したことにある。準自然利子率それ自体が不安定に変動していくので、経済は絶えず物価変動に晒されている。また準自然利子率 = 銀行利子率 となる均衡も完全雇用と関係ないので、実物体系で決まる均衡（=完全雇用）と貨幣的均衡の非対応も指摘されたことになる。この論文は『貨幣論』の後に書かれているので、ロバートソンはケインズを触媒としてヴィクセル的要素を取り入れたと判断される。ただし、それはそのままのヴィクセル的要素ではなく、不安定な経済観・実物的要因と貨幣的要因の結合というロバートソンの特徴がよく加味されたものである。

このように1920~30年代にケインズに極めて影響力のあった両者が、いずれもヴィクセル的分析を試みているのは興味深い。ケンブリッジ学派の特徴の1つが貨幣的な景気変動論の展開であったことも考慮すれば、ケインズとホートレー・ロバートソンとの関係を吟味することで、ヴィクセル・コネクション概念の有用性が確認できる。

「組織された」ヴィクセル・コネクション

以上のように20世紀の貨幣的経済理論の潮流を明確にする場合に、ヴィクセル・コネクションという概念は極めて有用である。そこでこの概念を次の5つの観点から再定義することによって、「ケインズ革命の本質」を含めてより豊穡な研究を促したい。すなわち、「組織された」ヴィクセル・コネクションの概念を提唱する。

まず、第1の観点はヴィジョンである。これは投資主導の（不安定な）貨幣経済観を意味する。このヴィジョンは、貯蓄から投資へという古典派的な因果関係を逆転させる可能性を持つ。同時に、投資の変動の源泉である金融市場の理論分析が不可欠になる。

第2の観点は分析対象の経済である。これは組織された信用経済である。現代の金融市

場の発展を見据えた先見性が窺える。

第3の観点は批判対象である。この理論群が批判する命題は、密接に関連する次の3つである。第1に貨幣数量説である。第2に実物と貨幣の二分法である。第3にセイ法則である。第1と第2の命題は、実物体系がそれだけで完結し、貨幣の体系から影響を受けないことを意味する。第3の命題は一般供給過剰が永続的に起こりうるか、また実物的な均衡に収束する力があるかどうかに関連する。言うまでもなく、このヴィクセル・コネクションという理論群は、これらの命題に否定的である。ただし完全に否定したかどうかは、判断の分かれる論点である。

第4の観点は分析用具である。以上3つの観点を含むような経済理論を構築するには、少なくとも次のような分析用具が不可欠になってくる。それは通時的・動学的な不均衡分析（インフレやデフレの累積的波及）であり、貯蓄～投資分析（貯蓄主体と投資主体の分離）であり、マクロ経済学的な分析（経済をマクロ変数の循環的な運動として記述）であり、貨幣的分析（フローやストックとしての貨幣の役割を重視）である。

第5の観点は歴史的な担い手である。この理論群に含まれる主な人々は、Wicksell, Robertson, Hayek, Myrdal, Keynes (1930)である。またケインズが『貨幣改革論』から『貨幣論』・『一般理論』へと自己の思想・理論を変化させていく時、その変化の道筋はヴィクセル・コネクションの発展の歴史を考察する格好の材料になる。

おわりに

今後には少なくとも2つの課題がある。

第1に、ヴィクセル・コネクションの概念を用いると「ケインズ革命」をどう評価できるかである。岡田(1992)~(1995)を除けば、この問いの答えはまだ整理されていない。詳細は他稿に譲るが、次の点だけは押さえておく。本稿でヴィクセルと『一般理論』との連続性を強調したわけではない（特に貯蓄と投資の乖離を利子率ではなく所得で調整する面）。その誕生にはヴィクセル・コネクションという媒介・土壌が不可欠であったことを提示しているだけである（もちろんこれが唯一のコネクションでもない）。

第2に、上記のようにヴィクセル・コネクション概念を整理しても、「貨幣理論を展開するには、過程分析、とくに累積過程の分析理論がなぜ必要となるか」（塩沢(1996) p.26）という疑問に詳細には答えていない。また、このヴィクセル的分析を批判的に克服してケインズは「生産の貨幣理論」の1つの形を形成したのだが、この貨幣的経済理論の一類型がどのようなものであるかもここでは明確には答えていない。その意味で「「生産の貨幣理論」の本体が何なのかが、かならずしも明らかでない」（美濃口(1980) p.116）という現状認識はいまだに有効と言わざるをえない。

ただし本稿でなしたようなヴィクセル・コネクションに関する展望は、貨幣経済理論に関する再認識とそれに沿った理論構築に貢献する前提作業である、とだけは確実に言えるであろう。

行路社

河野良太(1995a)(1995b)「ヴィクセルの貨幣および信用の理論 (上)(下)」『南山経済研究』第10巻第1号 pp.99-123、『松山大学論集』第7巻第1号 pp.37-72

河野良太(1995c)「ヴィクセルの通貨制度改革論」『松山大学論集』第7巻第2号 pp.23-42

田中秀臣(1997) 「鬼頭仁三郎の貨幣的分析・再考」 pp.45-62 森映雄編『金融およびそれに関連する諸問題』早稲田大学現代政治経済研究所 所収

玉垣良典(1985) 『景気循環の機構分析』岩波書店

辻正次(1995) 「K.ヴィクセルー不均衡分析のルーツ」 pp.196-207 日経編(1995) 『経済学の

先駆者たち』日本経済新聞社 所収

中野聡子(1989)「ジェボンスの交換理論の再評価 — ヴィクセルの貨幣認識との関係 —」『三田学会雑誌』 第82巻3号 pp.603-618

中野聡子(1995)「交換理論の展開」 pp.162-184 平井俊顕・野口旭編『経済学における正統と異端—クラシックからモダンへ—』昭和堂 所収

中山靖夫(1992)『貨幣経済の分析』東洋経済新報社

根岸隆・池尾愛子(1993)「青山秀夫氏と経済学」KIER 9307 京都大学経済研究所

橋本比登志(1995)「ヴィクセル伝に関する三資料」『南山経済研究』第10巻第1号 pp.37-56

原正彦(1994)『ケインズ経済学の再構築』東洋経済新報社

菱山泉(1990)『ケネーからスラッフアへ』名古屋大学出版会

菱山泉(1993)『スラッフア経済学の現代的評価』京都大学学術出版会

平井俊顕(1990)(1991)「ヴィクセル・コネクション(上)(下)—貨幣的経済学の軌跡—」『上智経済論集』第36巻第1号 pp.16-59、第36巻2号 pp.7-71

平井俊顕(1993)「ケンブリッジ学派における二つの流れとケインズ革命」 pp.271-304 平井俊顕・深貝保則編『市場社会の検証—スミスからケインズまで—』ミネルヴァ書房 所収

平井俊顕(1995a)「貨幣的経済学の興隆期—「ヴィクセル・コネクション」と「ケインズ革命」—」 pp.237-260 平井俊顕・野口旭編『経済学における正統と異端—クラシックからモダンへ—』昭和堂 所収

平井俊顕(1995b)「貨幣的経済学の興隆期—『ヴィクセル・コネクション』と『ケインズ革命』をめぐって—」『専修大学社会科学研究所月報』No.387 pp.19-22

平井俊顕(1995c)「学史研究における「知的緊張感」の意義」『専修大学社会科学研究所月報』No.387 pp.23-32

報』No.387 pp.43-47

平井俊顕(1996) 「『過去の理論』と『現代の理論』のあいだの知的緊張と交錯」『専修大学社会科学研究所月報』No.402 pp.3-17

藤井賢治(1986) 「ケンブリッジ利子論論争の背景－利子論におけるマーシャル的系譜とウィクセル的系譜－」『一橋論叢』第95巻第5号 pp.695-713

美濃口武雄(1980) 「『一般理論』の生成過程－『生産の貨幣理論』の観点から－」『経済研究』(一橋大学)第31巻第2号 pp.107-116

矢尾次郎(1950) 『物価理論の研究－貨幣作用の分析－』巖松堂書店

矢尾次郎(1962) 『貨幣的経済理論の基本問題－貨幣経済の構造と貨幣の作用－』千倉書房

吉澤昌恭(1990) 「ウィクセルの経済理論－貨幣と利子－」『広島経済大学 経済研究論集』第13巻第1号 pp.177-191

吉田雅明(1988) 「『貨幣論』の理論構造」『経済論叢』(京都大学)第142巻第5・6号 pp.91-108

吉田雅明(1995a) 「『ウィクセル・コネクション』という問いの持つ理論史的な意義について」『専修大学社会科学研究所月報』No.387 pp.36-38

吉田雅明(1995b) 「『貨幣論』の検証(2)～ウィクセル・コネクションは有効か?」『専修大学経済学論集』第30巻第2号 pp.149-169

Amadeo, E. J. & A. K. Dutt (1994) "The Wicksell-Keynes Connection: Dynamic Analysis, Loanable Funds, and Wage Flexibility", *Australian Economic Papers*, Vol.33, No.63

Brems, H. (1986) *Pioneering Economic Theory, 1630-1980*, Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press 馱田井正 『経済学の歴史 1630-1980 人物・理論・時代背景』多賀出版 1996

Blaug, M. (1992) Ed. *Knut Wicksell (1851-1926), Pioneers in Economics* 28,

London: Edward Elgar

Caporale, T. (1993) "Kunt Wicksell: Real Business Cycle Theorist", *Scottish Journal of Political Economy*, Vol.40, No.4 pp.471-476

Chiodi, G. (1991) *Wicksell's Monetary Theory*, London: Macmillan

Cottrell, A. & M. S. Lawlor (1991) "'Natural Rate' Mutations: Keynes, Leijonhufvud and Wicksell Connection", *History of Political Economy*, Vol.23, No.4 pp.625-643

Fischer, S. (1972) "Keynes-Wicksell and Neoclassical Models of Money and Growth", *The American Economic Review*, Vol.62, No.5 pp.880-890

Gardlund, T. (1956) *The Life of Kunt Wicksell*, Trans. from the Swedish by N. Adler, Cheltenham, U.K.: Edward Elgar, 1996

Givannetti, G. (1984) "The Role of the Rate of Interest: from Wicksell to Keynes' Treatise on Money", *Economic Notes*, No.2 pp.66-86

Hawtrey, R. G. (1913) *Good and Bad Trade*, London: Constable & Company, Reprinted as Economic Classics, New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1970

Hicks, J. (1967) *Critical Essays in Monetary Theory*, London: Oxford U.P.
江沢太一・鬼木甫訳 『貨幣理論』 オックスフォード大学出版局 1969

Hicks, J. (1977) *Economic Perspectives: Further Essays on Money and Growth*, London: Oxford U.P. 貝塚啓明訳 『経済学の思考法』 岩波書店 1985

Jackman, R. (1972) "Keynes and Leijonhufvud", *Oxford Economic Papers*

Jonung, L. (1979) "Knut Wicksell and Gustav Cassel on Secular Movements in Prices", *Journal of Money, Credit, and Banking*, Vol.11, No.2 pp.165-181

Kohn, M. (1981) "A Loanable Funds Theory of Unemployment and Monetary Disequilibrium", *The American Economic Review*, Vol.71, No.5 pp.856-879

Kohn, M. (1986) "Monetary Analysis, the Equilibrium Method, and Keynes's "General Theory"", *Journal of Political Economy*, Vol.94, No.6 pp.1191-1224

Leijonhufvud, A. (1981) *Information and Coordination: Essays in Macroeconomic Theory*, New York: Oxford U.P. 中山靖夫監訳『ケインズ経済学を超えて』東洋経済新報社 1984

Marchal, J. et J. Lecaillon (1967) *Theorie des Flux Monetaires*, Paris: Editions Cujas 溝川喜一訳『経済分析と貨幣』ミネルヴァ書房 1978、菱山泉訳『貨幣的分析の基礎』ミネルヴァ書房 1978

Mattesini, F. (1984) "The Wicksell Connection: A Variation on the Theme", *Economic Notes*, No.1 pp.121-138

Morishima, M. (1989) *Ricardo's Economics*, London: Cambridge U.P. 高増明・堂目卓生・吉田雅明訳『リカードの経済学』東洋経済新報社 1991

Morishima, M. (1992) *Capital and Credit*, London: Cambridge U.P. 安富歩訳『新しい一般均衡理論』創文社 1994

Patinkin, D. (1976) *Keynes' Monetary Thought: A Study of Its Development*, North Carolina: Duke University Press 川口弘・吉川俊雄・福田川洋二訳『ケインズ貨幣経済論 その展開過程』マグロウヒル好学社 1979

Robertson, D. H. (1934) "Industrial Fluctuation and the Natural Rate of Interest", *Economic Journal*, No.44 pp.650-656

Sandilin, Bo (1997) ed. *Knut Wicksell Selected Essays in Economics Volume 1*, London: Routledge

Snippe, J. (1987) "Monetary Equilibrium Versus the Wicksell Connection", *Banca Nazionale del Lavoro Quarterly Review*, No.161 pp.197-212

Stein, J. L. (1969) "'Neoclassical' and 'Keynes-Wicksell' Monetary Growth Models", *Journal of Money, Credit, and Banking*, Vol.1, No.2 pp.153-171

Tomo, S. (1995) "Wicksell's Notes on Jevons's Theory of Political Economy", *KSU Economic and Business Review*, No.22 pp.205-239

Trautwein, H. (1996a) "Endogenous Money: Modern Difficulties with the Wicksellian Approach", *Canadian Journal of Economics*, Vol.29, Special Issue pp.228-234

Trautwein, H. (1996b) "Money, Equilibrium, and the Business Cycle: Hayek's Wicksellian Dichotomy", *History of Political Economy*, Vol.28, No.1 pp.27-55

Uhr, C. G. (1991) "Knut Wicksell, neoclassicist and iconoclast", pp.76-120 *The History of Swedish Economic Thought*. Ed. Bo Sandelin, London: Routledge

Wicksell, K. (1898) *Geldzins und Guterpreise*, Jean 北野熊喜男・服部新一訳・北野熊喜男改訳 『利子と物価』日本経済評論社 1984

Wicksell, K. (1901) *Forelasningar i nationalekonomi* : *Teoretisk nationalekonomi*, Lund: Berlingska 橋本比登志訳 『経済学講義』日本経済評論社 1984

新潟産業大学 ディスカッション・ペーパー・シリーズ
Niigata Sangyo University Discussion Paper Series

- No.1 江口潜「為替レートのジャンプとミーン・リバージョンについてーゲーム理論によるアプローチ」1997年3月
- No.2 堂前豊「日本の銀行業における競争制限的規制ーその役割と変遷ー」1997年4月
- No.3 大阿久博「進化ゲーム理論の経済学への応用」1997年4月
- No.4 小峯敦「貨幣的経済理論の一潮流ーヴィクセル・コネクションの可能性ー」1997年5月
- No.5 小峯敦「貨幣的経済理論の一潮流（第2版）ーヴィクセル・コネクションの可能性ー」1997年7月